

# 疑問を持ち、考え、行動できる 国内外で広く活躍する若者を育てたい。



加朱 将也

MASAYA KASHU

赴任地  
 **エチピア**  
 赴任地での職種(活動分野)  
**体育教員**

滋賀県東近江市  
**滋賀県立八日市高等学校 保健体育科教諭**

高校時代、所属していたバレーボール部の顧問がJICA海外協力隊のOVで、話を聞くうちにアフリカやJICA海外協力隊に興味を持つ。大学在学中に応募し、卒業と同時にエチオピアへ。その後、ヨルダンでシリア難民支援にも携わる。現在は、滋賀県立八日市高等学校で保健体育科教諭として教育活動に従事。

## 現在も、日本で、世界で、スポーツ教育を展開中。

県下でも有数の歴史と伝統を誇る滋賀県立八日市高等学校。加朱さんは、JICA海外協力隊をはじめ海外での支援活動の後、生まれ育った土地で教職に就いた。体育科授業のほかにバレーボール部の顧問を務め、また、休みの期間を利用し、日本ラグビーフットボール協会の国際協力部門員として、スポーツを通じた国際協力の活動も行っている。

帰国からおよそ2年。加朱さんには生徒たちに伝えたいことがある。それは、エチオピアで知った、人はそれぞれ異なる環境で育ち、異なる価値観や考え方をもっていて当たり前だということ。自身がそうだったように価値観の異なる人々に関わる時には、悩みながらも成長していきける。その大切さを、スポーツを通して生徒たちに伝えていきたいと、日々、奮闘している。

## 「スポーツ」とは何か？ 現地にとっての意義を見つけ、広める。

体育教員としてエチオピアの学校に赴任した加朱さんは、軽視されるスポーツ教育の現状を目のあたりにした。「理科などに比べて体育の優先順位が低く、あまり予算が投じられない。学校に十分な設備や道具がないため、農村部の子どもたちはスポーツにふれる機会も少ない」と加朱さん。まずはスポーツ教育の意義を周知する必要があると痛感する。配属先の学校で活動が続ける傍ら、現地で活動中のJICA海外協力隊員と協力し、『ONE BALLプロジェクト』を立ち上げた。貧しい地域にはボールさえない。休日を利用して、サッカーボール1つを持ってエチオピアの地方部を周る。子どもにはスポーツをする機会を提供し、大人にはスポーツ教育の大切さを伝えるためだ。



指導者育成  
セミナーの様子

同僚との体育の授業



ONE BALLプロジェクトの集合写真

## 現地の人の共感を得て、 結果はより大きく出た。

『ONE BALLプロジェクト』の実施に当たって、理解が得られるまでの道のりは決して平坦ではなかった。しかし、熱心に活動が続けるJICA海外協力隊員たちの様子を見て、地元でも共感してくれる人々が現れる。プロジェクトに共感してくれた協力者は現地の言葉で、活動の意義を周りの人たちに伝えてくれた。加朱さんは言う。「私たちの姿と、現地の理解者の言葉が重なる時、文化や価値観の異なる人々が協働することになります。JICA海外協力隊の活動だけでもできたかもしれないが、ここまで大きな反応は生まれなかったでしょう」。加朱さんが帰国した後もプロジェクトは後輩隊員に受け継がれ、さらなるスポーツの輪を広げ、エチオピアの多くの子どもたちを笑顔にしている。

## 支援から、解決へ。 先進国で教育をする意味とは。

20代の頃から、アフリカでの開発支援や中東でのシリア難民支援に携わってきた加朱さんが教職に就いた理由。それは、現地で支援活動をする大切さを認めながらも、世界にある問題の根本を解決するためには、先進国に生きる人々が変わらなければ実現できないと気付いたから。これまでの自身の経歴から、“できること”“したいこと”“求められていること”を考えた時に、3つが合わさるライフワークとして日本の教育現場にたどり着いた。加朱さんが目指すのは物事に疑問を感じ、その答えを探し続け、行動できる人材の育成。生徒たちが勉学や日々の部活動などの学校生活を通じて、その素地を得ることができ環境づくりを目指している。



授業でも、クラブ活動でも、常に笑顔が絶えない

## 人との関わりほど、 大切に面白いものはない。

エチオピアは世界の中でも貧しい国と言われ、十分なモノがない。しかし、現地の人々がモノではなく人と頼り合いながら生きている姿を見て、加朱さんは多くを学んだ。「生徒を見ると、日本人は他者との関わりが希薄になってきているのではと感じます」。人と関わると、当然意見の対立や考え方の違いが生まれるが、それを乗り越えて協働することで、新しい発見があり、自分を成長させることができる。また、様々な人と出会う中で、行動する動機を見つけることができる。加朱さんが実際の体験から得た、人と関わる大切さ、楽しさを、たくさんの生徒に伝えていきたいと思っている。

上司に  
聞く!



滋賀県立八日市  
高等学校 校長  
岩田 篤夫さん

スポーツの楽しさを伝えるという強い思いをもって、より良い授業づくりに取り組まれています。コロナ禍の中で学園祭をどう企画・運営するかという時には、生徒の想いをくみ取りながら新しい発想で成功に導いてくれました。海外で得た広い視野と貴重な体験を伝え、自ら進路を切り拓いていく勇気を若者たちに与えてほしいです。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ

困難な状況だからこそ、外向きにチャレンジを!

国際協力の現場では、現地の人々と日本人の関わりからたくさんの可能性や学びが生まれます。コロナ禍の現在、この関わりを持つことが非常に難しい状況ですが、何か方法は何か模索してほしいです。世界の人々は日々困難と向き合っています。内向きならず、外に向けて力強く羽ばたいてください。